

[論 文]

外交官ルイス・ダ・クーニャの意見と企図

—啓蒙改革前夜のポルトガル改革論②—

A opinião e o projecto de D. Luís da Cunha

—Discursos para reformar Portugal na véspera de reforma iluminista ②—

疇 谷 憲 洋

Kurotani Norihiro

はじめに

こうして以上のことを考慮すると、おそらく幻視的 (visionariamente) ではあるが私は以下のようなことを考える。もし、国王陛下が、陛下御自らとともに、陛下につき従うことを希望する男女すべて、それも少なからざる数になるだろうが、さらに無数の外国人も伴って、西方の皇帝 (Imperador do Ocidente) の称号をその手にブラジルの地に宮廷を置くことをお望みになるなら、陛下は、かの巨大なブラジルの大陸が、人口に富みかつこの上なく繁栄するのを目にする御代にあられると。

そして私の意見では、その宮廷の所在地に最もふさわしい場所は、リオ・デ・ジャネイロの街になるだろう、そしてわずかな間で、リスボンよりも富み栄えることになるだろう。 [Cunha 2001:366]

17世紀末から18世紀前半にかけて活躍したポルトガル外交官、ルイス・ダ・クーニャ (D. Luís da Cunha, 1662~1749) は、その著述『政治的教訓』の中で、ポルトガルとその海洋帝国の改革と再編の必要性を述べ、その結論の一つとして、ポルトガル国王がブラジルのリオ・デ・ジャネイロに遷都し、「西方の皇帝」として大西洋帝国に君臨することを提案している。クーニャの意見では、ブラジルは気候も良く、ワインをはじめとするポルトガルやヨーロッパで採れる作物も収穫でき、移民の流入によって各種産業の発展も見込まれる有望な土地であった。そして、更なる利点として、強力な隣国スペインも隣におらず、「枕を高くして眠れる」のだとも説いている [Cunha 2001:366-373]。

このように、「ポルトガル宮廷の移転とブラジルの発展」という、その後の歴史の展開や、ブラジルの発展を予見する意見書を残したクーニャは、ヨーロッパの主要都市での経験を生かし、産業振興や宗教的寛容など、様々な提言を行い、18世紀半におけるポルトガル啓蒙思想家、いわゆる「エストランジェイラードス」の代表とされている人物である。また、後のジョゼ1世にあてた『政治的遺言』という著述の中で、セバスティアン・ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・イ・メーロ、後のポンバル侯爵を、ポルトガルの大臣職にあた

る国務秘書官に推薦したことで知られている。

『ポルトガル史』の著者、Joaquim Veríssimo Serrãoは、「ペドロ2世及びジョアン5世の治世、特に後者は、その時代の歴史において傑出した一群の著名な外交官に負うところが多かった。(中略)18世紀前半のポルトガル外交史において、ルイス・ダ・クーニャの名は最も高い位置を占めている」と、この時代のポルトガルの政治や文化に外交官が与えた影響と、その中におけるクーニャの重要性について述べている [Serrão 1980: 327-330]。また、思想史家José Sebastião da Silva Diasは、『ポルトガルとヨーロッパ文化 (16世紀～18世紀)』の中で「この頃 (1730年代)、パリで生活していたのが、身体は老いているが精神は若々しい、わが国の外交官で最も有名な人物、ルイス・ダ・クーニャであり、一種の託宣所 (uma espécie de oráculo) として、同時代人から意見を聞かれ助言を求められていた。(中略)啓蒙主義者としてのかれの眼には、すべてに啓蒙が必要に思われていた。宮廷、軍隊、教育、裁判所、そして全般的に、わが国の行政機構のすべての部門やすべての慣習が。」と、クーニャの鋭い批判精神と革新性、そして影響力について述べている [Dias 2006:169-170]。

同時代および後世へのクーニャの影響力は、かれの著述が筆写されて広まったり、公刊されたりしたことからもうかがわれる。また、Raul da Silva Veigaは、コインブラ大学図書館が所蔵する1142点に上るクーニャ関連のマニュスクリプトのカタログを作成している [Veiga 1991]。

こうしたクーニャについての本格的な研究書はなかなか公刊されなかったが、Isabel Clunyは、自らの修士論文を基に、『ルイス・ダ・クーニャとポルトガルにおける外交の理念』を著して、クーニャの生い立ちから外交官としての活動とその著述、さらに、芸術品や書籍の買い付けなど外交交渉以外の活動や私生活についても詳しく論じ、クーニャの全体像を明らかにしている [Cluny 1999]。また、Abílio Diniz Silvaは、アジューダ宮殿図書室所蔵の写本を底本に、他の文書館が所蔵する写本とも照合し、校訂を加えた『政治的教訓』のテキストを編集し、さらに伝記的情報や解説を加えたうえで、クーニャの宗教観について論考を加えている [Cunha 2001]。

わが国では、上智大学イベロアメリカ研究所発行の『ブラジル「発見」500年—その歴史と文化—』の中で、金七紀男氏が「ドン・ルイス・ダ・クーニャのブラジル遷都計画—啓蒙主義者による「ポルトガル・ブラジル帝国」構想」という論考を著して、冒頭に引用した『政治的教訓』の内容を紹介し、「ブラジル遷都論」の意義について考察している [金七2002]。

2012年はクーニャ生誕350年、2013年はユトレヒト条約締結300年にあたることから、リスボン国立図書館では、2013年1月17日に、学術セミナー「ルイス・ダ・クーニャとユトレヒトの交渉 (D. Luís da Cunha e as negociações de Utreque)」というセミナーが行われ、展覧会「政治の『託宣所』、ルイス・ダ・クーニャ (D. Luís da Cunha (1662-1749). O “oráculo” da política.)」も開催される (2013年1月17日～4月20日)。

このように、ポルトガル18世紀史、啓蒙思想史、ならびにブラジル史にとっても重要な人物であるルイス・ダ・クーニャについて、本稿では、かれの二つの著作『政治的教訓』と『政治的遺言』の分析を通じて、クーニャの意見や企図を整理し、さらにボンバル改革

との関連についても述べてみたい。

I. ポルトガル外交とルイス・ダ・クーニャの活動

1. 17世紀末～18世紀前半のポルトガル外交

クーニャが外交官として活動した時代は、ポルトガルにおいては、ペドロ2世、ジョアン5世の治世にあたる。この時期のポルトガル外交には、本国の独立と植民地帝国を維持しながら、一方で、ヨーロッパにおける国際的な威信を高め、イギリス、フランス、スペイン、オランダ、オーストリアといった大国とできる限り対等な立場に立つ、という課題があった [Meneses 2001]。

宮廷クーデタによって権力を奪取するとともに1668年にはスペインと条約を結んでの和平にこぎつけたペドロ2世は、イギリス、フランスそれぞれと関係を保ち、基本的には中立政策を維持していたが、その治世の末期、スペイン・ハプスブルク家のカルロス2世が嗣子無くして死し、後継者にブルボン家のアンジュー伯フィリップが指名され、フェリペ5世として即位、これがきっかけとなって、スペインの王位を巡って全ヨーロッパを巻き込んだスペイン継承戦争が勃発する。

ペドロ2世は、当初、フランスとスペインとの間に同盟を結んでいたが、こうした事態の転換と、イギリスの影響、とりわけ駐リスボン公使ジョン・メシュエンの交渉の結果、イギリスと相互防衛および通商条約を結んで、イギリス・オランダを中心とする大同盟側に立って参戦する。

スペイン継承戦争の幕引きを行ったユトレヒト講和会議には、クーニャ、そしてタロウカ伯爵ゴメス・ダ・シルヴァの2名が全権として臨み、フランス、スペインと停戦・講和条約を結んでスペイン継承戦争は終結した。この結果、ポルトガルは、フランスからアマゾン川・オイアポケ川間の領有権を認められ、アマゾン川兩岸を獲得することにより、アマゾン川の航行と内陸部への進出が容易になった。また、スペインからは、1705年以降占領されていたラ・プラタ川左岸のサクラメント植民地を回復した。

スペイン継承戦争の只中で即位したジョアン5世は、ヨーロッパ情勢がイギリスとフランスの対立を軸に、ヨーロッパ内部では中立政策を堅持しながら、ローマ教皇庁への働きかけを通じて国際的威信を高める政策を取った。その結果が、リスボン首都司教座の設置や、「いとも忠実なる王」の称号の獲得であった。

こうして、スペイン継承戦争終結以降も、植民地においては何度か小競り合いを経験するものの、以後しばらく、ポルトガルは、ヨーロッパにおいては中立政策を保ち、アメリカ・ブラジルにおいては内陸部への浸透・開発と領有権の確定を目指すことになる。その後のジョアン5世の治世においては、対トルコ戦（マタパン沖海戦）を除いて、ポルトガルがヨーロッパにおいて行った戦争はなく、アメリカにおいては地理学者を動員して地図を作成し、ユトレヒト条約で得たスペインやフランスとの境界画定を確認しながら [Almeida 2001]、18世紀前半を通じて、ミナス・ジェライスなど内陸部への人口の移動と開発が見られ、金の増産に伴う交易の振興や、人口の増加によって、ブラジルはポルトガル植民地帝国の基盤としての重要性を増していく。

2. 外交官ルイス・ダ・クーニャ

本項では、先行研究を基に、クーニャの生涯と活動について整理する [Veiga 1991: 5-18] [Cluny 1999] [Cunha 2001:25-117]。

ルイス・ダ・クーニャは、ジョアン4世の近臣であったアントニオ・アルヴァレス・ダ・クーニャと、マリア・マヌエル・ヴィレーニャの二男として、1662年、リスボンに生まれる。国王付肉切り役やトーレ・デ・トンボ文書館の改め方 (reformador) であった父アントニオ・アルヴァレスは、当時のポルトガルにおいてアカデミーを組織し知識人グループの中心となっていた4世エリセイラ伯爵ルイス・デ・メネーゼスと親交があり、ルイス・ダ・クーニャも幼い頃からその影響を受けていた。

コインブラ大学に進んで教会法での学位を取得すると、ただちにポルト控訴院判事に任ぜられ、リスボン嘆願院に異動した後、1695年に、国王ペドロ2世により、駐ロンドン特使に任命される、以後、1749年にパリで死去するまで、オランダ、スペイン、フランスと、当時のヨーロッパの中で強国の地位を占めていた国でのポルトガル外交を担当するとともに、スペイン継承戦争の折には駐ロンドン公使としてイギリス政府との交渉や情報収集を行うなど重要な役割を果たし [Cluny 2003] [Silva 2003]、ユトレヒト講和会議にも全権の一人として出席し、戦後処理や条約の締結を行っている。

外交官としての活動の一方で、クーニャは、国王や歴史アカデミーのための芸術作品・書籍・実験器具の買い付けや、植民地の正確な地図作成のための地理学者のリクルートなど、文化的エージェントとしての活動も行っている。また、本国に送った膨大な報告書の他にも、ユトレヒト講和会議での経験を踏まえた『ユトレヒトの和約の覚書』と『ユトレヒト、バーデン、アンヴェールにて締結された通商・講和条約のパラフレーズと翻訳』を執筆し、前者は国務秘書官ディオゴ・デ・メンドンサ・コルテ・レアルに、後者はアスマール伯ジョアン・デ・アルメイダに献上され、ポルトガル政府及び貴族に影響を及ぼすことを意図していた。

何よりも、ロンドンやハーグ、パリといったピレネー以北のヨーロッパの文化的中心での滞在という経験は、フルリーやアルベローニと言った政治家から、ダンヴィルなどの地理学者、そして、各地に存在するポルトガル系ユダヤ人コミュニティといった、様々な人間と親交を結ぶ機会をもたらした。異端審問所の迫害を恐れてポルトガルを出国し、イギリス、オランダ、ロシア、フランスと学問を重ねながら流浪した新キリスト教徒系知識人アントニオ・ヌネス・リベイロ・サンシェスも、ハーグ時代のクーニャと知己を得た後、ロシアからパリに移り住んだ際には改めて親交を結び、クーニャの死にも立ち会っている [Mendes, 1998]。そして、リベイロ・サンシェスの宗教的寛容論やポルトガル改革論には、クーニャのそれとも共通するところが見られる。

このように、50年に渡る外交官としての活動は、クーニャに、啓蒙時代のヨーロッパの発展と、ポルトガルの遅れとを同時に認識させるものであった。こうした体験を踏まえて執筆したのが、憂国と献策の書である『政治的教訓』と『政治的遺言』である。

Ⅱ. 『政治的教訓』—ポルトガル・ブラジル帝国のヴィジヨナー

1. 執筆の背景ならびにテキスト

1736年、ジョアン5世は、国務秘書官ディオゴ・デ・メンドンサ・コルテ・レアルの死去に伴い、国務秘書官体制の改革を行う。それまでのものを改編して、新たに、内務担当国務秘書官、外務・陸軍担当国務秘書官、海外領・海軍担当国務秘書官の三つのポストが設置された。この時任命された3名は、いずれも外交官としての経験があり、クーニャとも親交があった [Subtil 2006:38-43.]。

とりわけ、外務・陸軍担当国務秘書官に任命された駐ロンドン大使マルコ・アントニオ・デ・アゼヴェード・コウティーニョ (1688~1750) は、クーニャの傍らで外交官として働いた経験があり、クーニャがかれを「わが息子 (meu Filho)」と呼ぶほど親しい間柄であった。この時、アゼヴェード・コウティーニョは、クーニャに、国務秘書官職に就くにあたっての助言ないし教訓を執筆することを依頼し、それに応えてクーニャは、それまでの外交官経験を踏まえながら、国務秘書官に就任した時の心構えや、ポルトガルの現状分析と改革案について論じた文書の執筆に取り掛かかった。

しかしながら、結局この文書は、アゼヴェード・コウティーニョに送られることはなく、クーニャの甥のクーニャ・マヌエル宛の書簡を付けて「マルコ・アントニオ・アゼヴェード・デ・コウティーニョへの教訓」そしてアフリカ植民地 (アンゴラ・モザンビーク) の再開発論とともに「政治的教訓」としてまとめられる。

その後この文書は、ポルトガル政府関係者を中心に筆写・回覧されて広まり、19世紀の政治家・思想家に様々な影響を与えたといわれている。そして、1930年には『マルコ・アントニオ・デ・アゼヴェードへの未完の教訓』というタイトルで出版され、18世紀ポルトガル史および啓蒙主義研究の重要な資料となった。そして、2001年には、ポルトガル大航海時代記念委員会 (Comissões Nacional para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses) から、Abílio Diniz Silva解説・校訂版の『政治的教訓 (Instruções políticas)』が出版されている。

本章では、このAbílio Diniz Silva校訂版をもとに、『政治的教訓』の中で述べられているルイス・ダ・クーニャの意見や企図について論じる。

2. 「政治的教訓」の企図

Silva校訂版の『政治的教訓』の構成は、表①の通りである。内容については、すでに金七紀男氏が前出の論考の中で整理しているので [金七 2002]、ここでは、『政治的教訓』の性格とその重要な論点について述べる。

(1) 国務秘書官としての心構え

クーニャは、甥のマヌエル・ダ・クーニャに宛てた書簡の中で、アゼヴェード・コウティーニョが国務秘書官に就任する際、かれに「教訓」を執筆するよう依頼され、そしてそれを断続的に執筆したいきさつを述べ、結局かれにはそれを送らず、叔父と同じく外交官の経験を経て、国務秘書官の地位に就くことが有望な (クーニャによれば「最も適しているのは、内務担当秘書官である」) 甥にこの「教訓」を送ることにしたことを述べている。

そして、「アゼヴェード・コウティーニョへの教訓」においては、「教訓」の執筆を依頼

されたことへの喜びと、ジョアン5世による國務秘書官体制の改編の必然性について分析した後、功績によって國務秘書官の地位に就いた故の他の血統貴族からの嫉妬に注意すること、執務室はきちんと整理し時間を有効に活用すること、などといった職務上必要な助言を行っているのだが、中でも重要なのは、国王への対応の仕方である。

同様に以下のことも疑いない。国王陛下が、ご自身の名誉あるいは利益に反するようなご決断を取ろうと望んでいると判断したときには、確固とした根拠を基に、それから生じる不都合を陛下に上申せねばならないが、それは忠告のように見えるやり方であって、反駁ではない。というのも、反駁は、君主の心を動かすかわりに、固執させてしまうのだから。 [Cunha 2001:200]

このように、絶対王政下のポルトガルにあって、いかに国益に合うように君主の意見を導くことが必要か述べ、さらに、王太子ジョゼの妃がスペイン王家の出身であることから、王太子夫妻の取り扱いにはとりわけ慎重になることを助言している。

(2) 隣国スペインとポルトガル

スペイン継承戦争というポルトガルの独立を再び脅かしかねない事件を外交交渉の現場で経験したクーニャにとって、隣国スペインはまさに脅威であった。

今世紀においてカスティリヤがポルトガルに対して持っている優位 (vantagem) の第1は、その位置にある。今世紀、というのも、それ以前、われわれはとても幸福であった。つまり、その時カスティリヤの王冠はオーストリア家の君主が有していたのだが、かれはブルボン家の君主と敵対していたので、われわれはそれらが強力に同盟して牽制してくることから安全であった。しかるに、ルイ14世の孫がカスティリヤを継承するとすぐ、われわれを取り囲む大西洋の海岸線とカスティリヤとの国境という境界の他には、こうした大きな便宜は失われたのだ。 [Cunha, 2001:204]

このようにクーニャは、スペイン継承戦争以後の地政学的変化を筆頭に、スペインがポルトガルに対して持っている優位を5つ挙げている (表①参照)。このうち、地政学的な位置と国土の広さに関しては、手の打ちようがないものの、第3の人口的な優位に対しては、後に述べるように、ポルトガルからの流失を抑え、人口を増加させる方策を提案している。第4の軍事的優位に対しては、スペインのフェリペ5世が陸海軍の増強を行っている一方、中立政策を取るポルトガルにはそれに対する取り組み欠けていることを指摘した上で、他のヨーロッパ諸国の例を引き合いに出しながら、同盟国が軍事援助を行ってくれる最低限の国防力を持つことを提言している。そして、第5の、本国及び植民地の豊かさについては、国内産業の保護や、会社設立、リスボンにおける自由貿易港の設置、ブラジルのさらなる開発を通じて、経済を活性化させて国力の増強を図ることを提案している。

表① [政治的教訓・構成]

I. 「ルイス・ダ・クーニャ・マヌエルへの教訓」
II. 「マルコ・アントニオ・デ・アゼヴェード・コウティーニョへの教訓」
1. 個人的な助言
2. 政治的教訓
(1) スペイン（カスティリヤ）がポルトガルに対して持っている優位
優位①：スペインの地政学的位置
優位②：スペインとポルトガルの国土の広さの違い
優位③：スペインとポルトガルの人口比
—ポルトガルからの人的「出血」現象—
出血①：修道院へ
出血②：インディアへ
出血③：異端審問所の迫害による「新キリスト教徒」の流出
(出血③に対する対策①)：異端審問所の制御
(出血③に対する対策②)：「背教者」の財産没収の禁止
(出血③に対する対策③)：新キリスト教徒への大贖宥
(出血③に対する対策④)：ユダヤ人に信仰の自由を認める
優位④：軍事力
優位⑤：経済力
(2) ポルトガルの産業振興策
①メシユエン条約再考
②奢侈品禁止令
③会社政策（東インド、大西洋）
④リスボンに自由貿易港を設定
⑤ポルトガルの行財政改革
(3) 結論①：貴族の再生と活用
(4) 結論②：ポルトガル海洋帝国の再編
・ポルトガル・ブラジル帝国構想
・リオ・デ・ジャネイロへの首都移転構想
III. アフリカ植民地再開論（1725年の書簡）

[Cunha 2001] より作成

(3) 「国家の身体からの出血」

スペインがポルトガルに対して持っている優位性の一つが、人口の違いであった。18世紀初頭のスペイン本国の人口が700～750万であったのに対し、ポルトガルの人口は200万人程度であったと言われている。そうしたスペインと比して少ない人口の増加を妨げるものが、「国家の身体からの出血 (Sangria do Corpo de Estado)」であった。

『政治的教訓』においては、ポルトガルにおける修道院・聖職者の多さとかれらが貞潔

を守ること、そして海外植民地への流出によって、人口の増加が妨げられているのだが、さらに問題となるのは、「第3の出血」であった。

第3の出血は、それまでのものよりも国家の身体にとって危険である、というのも、異端審問所が血抜き士 (sangrador) となっていて、敢えて止血をしようというものがないからである。かくして必然的に、血液は流れ出すままになり、体力のすべてを失ってしまうことになるのだが、それはつまり、異端審問を恐れた人びとが、その財産とともに毎日ポルトガルから出て行って、他の国々を富ませているということだ。

[Cunha 2001:235]

ヨーロッパ各地、とりわけオランダで、ポルトガル・スペイン系のユダヤ人コミュニティとじかに接触を持っていたクーニャにとって、「新キリスト教徒」として異端審問所に迫害されたポルトガル人が亡命し、他国で安住の地を得て経済的に繁栄しているという事態は、単なる国力の流失以上のものであった。しかもクーニャによれば、

さもなくば御覧あれ、ベイラ地方やトラズ・ウズ・モンテス地方、そしてそこにあるファンダンやコヴィリヤンといった町、ガルドヤやブラガンサといった都市がどうであったかを。そこではかつて商業や工業が開いていたのだが、今では、そこに異端審問が入ってきてからというもの、その住民を逮捕し損なっているのだ。

[Cunha 2001:245]

このように、クーニャは、新キリスト教徒系住民が比較的多数のベイラ地方やトラズ・ウズ・モンテス地方では、新キリスト教徒を担い手とする商工業が発展する可能性があったこと、そしてその芽が異端審問所の活動によって途絶えたと主張しているのである。

このように、「国家の身体の出血」の原因を、修道院や異端審問所にあるとするクーニャの言説には、啓蒙期のヨーロッパの反教會的傾向の影響が見られる。そしてクーニャは、こうした新キリスト教徒・ユダヤ系ポルトガル人の流出を防ぎ、呼び戻すために、異端審問所の改善のみならず、ポルトガルにおけるユダヤ人の信仰の自由を認めるべきだという提言も『政治的教訓』の中で行っているのである。

(4) 大西洋を超えて—ポルトガル・ブラジル帝国の構想—

このように、強力なスペインを隣国に持つという状況下で、ポルトガルの国力の増強のための方策を説いたクーニャであったが、『政治的教訓』においては、結論として、人材としての貴族の再生と活用、そしてインドからアフリカ、大西洋、ブラジル、ヨーロッパを結ぶ「ポルトガル・ブラジル帝国」の構築を提言している。

冒頭で述べたように、その帝国の中心となるべき場所は、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロであった。18世紀前半、ブラジルの総督府は、アフリカから距離的に近く砂糖生産地帯を抱えるバイアアにあったが、ミナス・ジェライスにおける金鉱の発見や、ブラジル南部・内陸部の開発の進展によって、南部の港湾都市リオ・デ・ジャネイロが成長していた。クーニャは、こうした金鉱山とのアクセスや、さらにアフリカ、インドとのアクセス、広

大な領土と多様な気候・作物など、リオ・デ・ジャネイロに中心を置く帝国の有望性を説いている。そしてクーニャは以下のように続ける。

しかしながらこの場合、貴殿（アゼヴェード・コウティーニョ）は私に問うだろう、陛下はポルトガル本国をどうすべきなのか、と。この質問に応えるためには、ポルトガルがどのようなものかを知る必要があるのだが、それは（すでに考察したように）、大陸の縁（uma ourela de terra）に過ぎず、それも3つに分かれていて、1番目は（そうでない可能性もあるのだが）あまり耕作されていない土地であり、2番目は修道会に属していて修道院を養い、そして3番目は、穀物を少しは生産するが、しかしながら他所からの輸入がなければその住人を養うのには十分ではないのだ。

[Cunha 2001:366-367]

このように、ポルトガルは、土地も狭く、開発も進んでおらず、3分の1の土地は修道会に属し、生産される穀物も十分ではなく、油やワイン、塩についても、ブラジルで十分に賄えることから「ポルトガルを維持するためにはブラジルの富がまったくもって必要であり、そしてブラジルを維持するためにはポルトガルは全く必要ないのであります」と説いて、君主がブラジルに移り住むことの有益性を説いている。その一方で、ポルトガル本国は、副王によって統治されることを提案している。

このように、クーニャは自らの外交官経験を基に外国の様々な事例や自身の体験を加え、これから國務秘書官として国政に携わるアゼヴェード・コウティーニョ、そして甥のクーニャ・マヌエルの参考にするために、「政治的教訓」を執筆したのだが、その論理的帰結は、「リオ・デ・ジャネイロを首都とするポルトガル・ブラジル帝国」の構想であった。そしてこの構想は、1807年のフランス軍侵入によるポルトガル王家のリオ移転、1815年の「ポルトガル・ブラジル・アルガルヴェ連合王国」の成立、さらには1822年、ポルトガル王家出身のペドロ1世を推戴してのブラジル独立と「ブラジル帝国」の成立（～1888）という形で「実現」する。

Ⅲ. 『政治的遺言』—啓蒙改革に向かって—

1. 執筆の背景とテキスト

国王ジョアン5世は、1740年代には体調を崩し、その長い治世にも終わりが見えてきていた。こうした状況下で、ルイス・ダ・クーニャはジョゼ王太子にあてた献策書の作成に取り掛かる。これが『政治的遺言』である。自由主義革命期の1820年に『偉大なるD.ルイス・ダ・クーニャが、その統治を始める前の国王D.ジョゼ1世陛下に向けて書いた手紙、あるいは政治的遺言』というタイトルで公刊され、1943年には、Manuel Mendes編・解説版がセアラ・ノーヴァから再刊された。本章では、このセアラ・ノーヴァ版を用いて、『政治的遺言』に記されたクーニャの思想と企図について検討する。

2. 「政治的遺言」の企図

(1) 國務秘書官人事の提案

クーニャは、「…すでにお分かりのことと思いますが、私は、殿下が、負担軽減の口実

で、首相 (o primeiro ministro) を用いるべきだという意見ではありません」と述べ、ポルトガルやスペインの例を引きながら、寵臣政治の弊害を説き、その上でポルトガルの國務秘書官体制の再編を提案している。『政治的遺言』執筆のころ、海外領・海軍担当のゲーデス・ペレイラは死去しており、また内務担当のモタ・イ・シルヴァも退任を願い出ていることから、その後任として、

すなわち、内務担当にはセバステイアン・ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・イ・メーロを。その性質は、わが国民のそれと同様、いささか散漫なところがありますものの、忍耐力があり、思索的であります。そして、海外領・海軍担当にはゴンサロ・マヌエル・ガルヴァン・デ・ラセルダを。と言いますのも、かの者には、迅速かつ実践的な判断力があり、また長年海外領評議会に勤務し、そこで、植民地の勢力や通商、統治について大いなる認識を有しているのであります。そして殿下は、このような形で、大いなる利益とともに、これらの大臣の奉仕を頼みとすることができますでしょうし、またかの者たちは、外務・陸軍担当の國務秘書官マルコ・アントニオ・デ・アゼヴェード・コウティーニョともよく理解しあって活動できであります。というのも、前者は、その親族であり、後者は、常にその最も親しい友人であったからであります。
[Cunha 1943: 26-27.]

というように、外交官としての経験を有し自分とも親交のあるセバステイアン・ジョゼとガルヴァン・デ・ラセルダの二名を推薦するとともに、その理由として、彼らの資質や経験もさることながら、留任するアゼヴェード・コウティーニョとの人間関係にも言及している。そしてここで推薦されているセバステイアン・ジョゼこそ、王太子ジョゼ即位時に國務秘書官に任命され、1755年のリスボン大震災という例外的状況の中で権力を掌握し、一連の啓蒙改革を推進していく、後のポンバル侯爵である。

(2) 「父としての」国王の務め

寵臣政治の弊害と國務秘書官体制の再編を説いたのち、クーニャは、国王として何をなすべきかについて論じる。この時クーニャが用いた論法が「国家の父としての国王」であった。表②に見られるように、クーニャは国王の父としての務めを5つ挙げている。その第1は、後継者を残すことであった。王太子ジョゼには、マリア王女（後のマリア1世）を頭に4人の娘がいるが、男性の後継者はなく、マリア王女の縁組次第では、ポルトガルが他国に吸収される危険性すらあった。1581年からのスペインとの同君連合が、国王セバステイアンが嗣子なくして戦死したことに起因することから、1640年の「独立回復」後の外交の現場を生きたクーニャにとっては、後継者問題はポルトガルの独立と存続を維持するためにとっても重要な問題であった。

そして、第2の務めとして、国王と臣民のつながりを大事にすることを述べている。クーニャによれば、ポルトガル王家には、臣民に公開しながら食事を行う習慣があったのだが、スペインとの同君連合の時代にこの慣習は途絶えてしまった。イングランドのエリザベス1世の例も引きながら、クーニャは、国王ができる限り臣民の前にその姿を現し、父としての国王を可視化させることで、国王と臣民のつながりを保つことを説いている。

表②『政治的遺言』・構成

1. 首相／寵臣政治について
 2. 国務秘書官人事の提案
 3. 国王＝国父の務め
 - (1) 後継者を残す
 - (2) 君主と臣民のつながりを大切にする
 - (3) 家計／財政に気を配る
 - (4) 借金を作らない
 - (5) 自分の土地を巡って、実情を視察すること
 4. 隣国スペインとの比較・国富論
 - (1) 国防力の整備
 - ①同盟国の支援を受けるに足る国防力の整備の必要性
 - ②人材の育成
 - ③信賞必罰・規律化
 - (2) 都市の治安対策
 - ①リスボンの市街地に街灯をつける
 - ②パリにならって騎兵隊と歩哨を置く
 - ③各地区（Bairro）の住民に関する情報を報告させる
 - (3) 産業振興の必要性
 - ①メシュエン条約体制への批判
 - ②交通と流通の発展
 - ③地方の状況の把握
 - (4) 3つの「出血」※
 - ①修道院に入る人々
 - ②インドに行く人々
 - ③異端審問所による迫害
 - (5) ヨーロッパ諸国との交易
 - ①フランスとの交易品
 - ②イギリスとの交易品
 - ③オランダとの交易品
 - ④関税政策・代替工業振興策の提案
- （なお、最後の2ページは、欠落が多く、中途半端に終わっている）
※原文中ではquatro sangria（4つの出血）だが、内容に則して「3つの出血」とした。

[Cunha 1943] より作成

第3の務めは家計に気を配ること、第4の務めは借金を作らないこと、というように、財政面での国王の務めについて論じた後で、

家族の父としての第5の務めは、自分の土地を訪ね、よく耕されているかどうか、あるいはそれをいくらかでも横領されていないかどうか知ることでありますが、それ

は、その土地から引き出せる利益がその家を維持するのに不足しないようにする目的であります。そしてこれはまた、君主の義務でもあるように思われます、さもなくば、言いたいこと以上には自ら所有しているものを知らないということでもありますし、聞くで見るとでは大違いということになるでしょう。ゆえにもし、殿下が自分の王国を巡ることを望むなら、第一に分かることは、それが隣国に比して、その領域が狭隘であるということでもあります。 [Cunha 1943, p.39.]

と、君主が自分の国について自ら知ることの重要性を説き、以下、多くの土地が国家の手を離れていることや、国内の流通に必要な交通手段が欠けていること、多くの集落が崩壊し、産業も荒廃していることなどを述べ、その原因と対策について論じる方向に移る。

この後の部分は、表①と表②を比較すれば明白なように、クーニャが『政治的教訓』で論じた内容とかなり共通している。こうしてクーニャは、『政治的教訓』では国務秘書官となるべきアゼヴェード・コウティニーニョ、クーニャ・マヌエルに助言したことを、『政治的遺言』では、これから国王となる王太子ジョゼに改めて進言しているのである。

(3) 都市の治安対策

このように、内容がかなり共通している「政治的教訓」と「政治的遺言」であるが、「政治的遺言」にのみ見られる内容もある。

軍隊における規律と信賞必罰の重要性を説き、ポルトガルの司法制度についての批判と改善案を述べたのち、クーニャは、都市の治安の整備について言及する。他のヨーロッパの都市の例に倣って、リスボンのすべての街路に照明を設置し、パリの例に倣って、騎兵や歩哨を置いてリスボンの治安を維持することを説いた上で、民衆の監視の必要性を説く。

第3に、監督官 (corregedores) や治安判事 (juizes do crime) が、それぞれの担当地区に住む人々について、どこの出身か、何をして暮らしているか、どんな人間と付き合いしているか、そして新たにそこに住むようになったものについての正確なリストを、控訴院長 (presidente do paço) と司法官 (regedor das justiças) に毎月提出することを義務付けるべきであります。それは、怠け者 (ociosos) やごろつき (vagabundos) がそこに居住するのを認めないためで、というのも、知り合いでないからといって物を奪ったり殺したりするのはこの者たちなのであります。そして売春婦も、こうした無分別の原因の大部分になっているので、司法官たちが彼女たちにそこで起きるであろう無秩序の罪を起こさせないために、その管轄下に受け入れないようにすべきです。同様に、貧民についても知っておくべきであります。というのもそれは、かれらがいかなる方法でも絶対に働くことが出来ない場合を除いて、施しを要求することを許可しないためであります。(中略) 慈悲はとても称賛されるべきものであり、福音もそれを勧めているのであります。それは、すべての種類の悪徳の原因となっている怠惰を増長させるためのものではありません。

[Cunha 1943:50-51]

このようにクーニャは、治安が悪く、夜には犯罪も頻発していた当時のリスボンの都市

環境の改善を訴えたが、こうしたリスボンの治安対策の提案は、ポンバルによる警察総監局 (Intendência-Geral da Polícia) の設置 [Subtil 1998] や、警察総監ピナ・マニケによる一連の政策を予見するものであった。

おわりに「託宣所」ルイス・ダ・クーニャ

クーニャの死から1年後の1750年8月、ジョアン5世が死去し、王太子ジョゼが即位する(ジョゼ1世)。先述したように、この時、国務秘書官の人事が行われ、『政治的遺言』の中で国務秘書官として推薦されていたセバスティアン・ジョゼが、アゼヴェード・コウティーニョの後任の外務・陸軍担当大臣に任じられた。さらに大震災後の1756年に2度目の国務秘書官人事が行われ、セバスティアン・ジョゼが内務担当国務秘書官に就任した際、ルイス・ダ・クーニャの甥のクーニャ・マヌエルが、その後任の外務・陸軍担当国務秘書官に任じられた。以後、1775年に死去するまで、クーニャ・マヌエルはその地位にあり続け、ポンバル体制の一翼を担うことになる。こうして、『政治的教訓』『政治的遺言』で予見・提案された2名の国務秘書官への就任が実現するが、その一方で、ポンバルは、ジョゼ1世の寵臣として独裁的な権力を振り、クーニャが『政治的遺言』で警告した「寵臣政治」が現出している。

このポンバル政権下で行われた政策の中で、『政治的教訓』『政治的遺言』の内容と関連するものを挙げると、次のようなものがある。

- ・「グラン・バラ&マラニャン総合会社」(1755年) など、一連の特権会社設立
- ・コヴィリャン(ベイラ地方)の王立毛織物工場再興など、一連の工業振興政策
- ・「新キリスト教徒と旧キリスト教徒の差別を撤廃する勅令」の発布(1773年)
- ・ブラジルの首府がバイーアからリオ・デ・ジャネイロに移転(1763年)

このように、ポンバル期に実施された政策の多くが、すでにクーニャの着想の中にあつたものであり、こうしたことからクーニャは「ポンバルの先生」とも称されている。

さらに、1807年の宮廷のリオ移転ならびに1815年の「ポルトガル・ブラジル・アルガルヴェ連合王国」の成立、19世紀の自由主義改革の中での修道院解散令や道路・鉄道のインフラ整備と産業振興、ヨーロッパ諸列強によるアフリカ分割という文脈の中でアンゴラとモザンビークをつなぐポルトガル植民地の構想を提示した、「バラ色地図」の作成(1886年)など、19世紀においてもクーニャの提案・企図の影響や関連を見て取れるものは数多い。1685年に駐ロンドン公使に任命されて以来、一度も帰国することなくパリで客死したクーニャであったが、その活動と著述は、近代ポルトガルの形成にとって、まさに「託宣所」ともいえるべき位置を占めていると言えるだろう。

[参考文献]

—一次史料—

Cunha, D.Luís da, 1943, *Testamento Poítico*, Seara Nova

Cunha, D. Luís da, 2001, *Instruções Políticos*, CNCDP, Lisboa.

—二次文献—

Almeida, André Ferrand de, 2001, *A Formação do Espaço Brasileiro e o Projecto do Novo Atlas da América Portuguesa (1713-1748)*, CNCDP, Lisboa

Cluny, Isabel, 1999, *D. Luís da Cunha e a Ideia de Diplomacia em Portugal*, Livros Horizonte, Lisboa.

Cluny, Isabel, 2003, A Diplomacia Portuguesa e a Guerra de Sucessão de Espanha, in AA.VV., *O Tratado de Methuen (1703)*, Livros Horizonte, Lisboa.

Mendes, Antonio Rosa, 1998, *Ribeiro Sanches e Marquês de Pombal-Intelectuais e poder no absolutismo esclarecido-*, Cascais.

Meneses, Avelino Freitas de, 2001, A Diplomacia e as Relações Internacionais, in *Nova História de Portugal, VII, Portugal no Paz da Restauração ao Ouro do Brasil*, Editorial Estampa, Lisboa:148-189.

Silva, Abílio Diniz, 2003, D. Luís da Cunha e o Tratado de Methuen, in *HISTÓRIA*, Revista da Faculdade de Letras, Porto, III Série, vol. 4, pp.59-84.

Silva, José Sebastião da Silva Dias, 2006, *Portugal e a Cultura Europeia (Séculos XVI a XVIII)*, Campo de Letras.

Subtil, José, 1998, Governo e Administração, in Hespânia, António Manuel (Coordenação de), *O Antigo Regime (1620-1807)*, História de Portugal (Direcção de José Mattoso), vol. 4, Editorial Estampa: 141-167.

Subtil, José, 2006, *O Terramoto Político (1755-1759) - Memória e Poder-*, Universidade Anatónoma de Lisboa.

Veiga, Raul da Silva, 1991, *Catálogo de Documentos do Cartório de D. Luís da Cunha, 1709-1749*, História Moderna e Contemporânea 8, Instituto Nacional de Investigação Científica, Coimbra.

金七紀男, 2002, 「ドン・ルイス・ダ・クーニャのブラジル遷都計画—啓蒙主義者による『ポルトガル・ブラジル帝国』構想—」, 『ブラジル「発見」500年—その歴史と文化—』, ラテンアメリカ・モノグラフ・シリーズNo.13, 上智大学イベロアメリカ研究所:3-11.

※謝辞：今回の論文を執筆するにあたって使用した D.Luís da Cunha, *Testamento Poítico*, Seara Nova, 1943.は、2001年4月～5月にかけてポルトガル北部において行われた国際交換研修プログラムの際に、ヴァレンサ・ド・ミーニョの国際ロータリー会員、Pinto Neves氏より寄贈いただいたものである。ここに記して厚く御礼申し上げる。